

特集 進化する宿場町のDNA

新宿場町おおづ

第1部

宿場町

おおづの始まり



細川忠利肥後就封は寛永九年であり三年後の寛永十二年には参勤交代の制度が定められ大津宿駅つくりが始まり大津殷盛時代をむかえることとなる。上井手の開さくにより南方に築き揚げた土堤の上に旅籠屋、

小売店、露店を建て承応二年(1654年)には光尊寺が開基され民心の安定に貢献し、塘町筋の集落が形成された。大津手永会所が機構、建物ともに完備し、

現菊池郡東部地方の政治経済、軍事にわたる中心地となったのは

宝暦年間(1751年~1764年)であり、

手永会所は現鶴口日吉神社参道鳥居より西側に位置し五十一村を統括した。

一方会所に付随して御茶屋(本陣)・御客屋(脇本陣)が出来、現仲町は役所街の町並が充実し、上大津に年貢米貯蔵の大津御蔵が建ち、阿蘇を願客とした豪商が軒を並べ、

東は上大津箕戸口より西は室箕戸口にいたる三〇丁の町並が完成し大津手永会所所在地とし、参勤宿駅として明治維新にいたるまで一二〇年の殷盛をえたのである。 —大津町史より

井手ができたことが繁栄の始まり

加藤清正は、肥後入国後最初に行ったことが、千年以上前にあったといわれる「下井手」の作り直でした。白川から水を引き、良い水田を増やし、米などを多く収穫できるようにしたのです。それは、人々のくらしを安定させるためでした。その後、上井手を作ろうとしますが、上井手を作るのはとても難しく計画は休止してしまいます。しかし、寛永九年(1636年)に細川忠利が工事を再開させます。その後、孫の綱利が大津から堀川まで上井手を開通させます。そして、井手沿いの「塘町筋」には、お寺や神社が建てられ参勤交代の宿場町として大きく発展していきます。

最初の宿場町 大津

参勤交代の時に、熊本を出発した藩主の行列は、大津の御茶屋である「本陣」で最初の夜を過ごしました。その日は、箕戸口と言う臨時の関所を作って、出入りを制限し、人々は早くから道路に座って行列を迎えました。町は奇麗に清掃され、町全体が静まり返っていました。しかし、参勤交代の行列が消費する費用は多く、各宿場町はとても繁栄しました。もちろん、大津町も例外ではありませんでした。宿場町として大津町はとても繁栄することになります。現在の大津町の繁栄は、正に宿場町の時代から始まったと言っても過言ではないのです。

参考文献 「おおづ くいま・むかし」 「大津町史」

